

結 成

近未来における

病院改革プロジェクトチーム

附属病院長 原田 征行
(整形外科講座教授)



平成十一年四月二十七日に、臨床教授、業務連絡会議、事務部のメンバー十二人で構成された。隔週の月曜日から九時から開催し、これまで七回の会議を行った。

前大学医学部附属病院のありべき姿を考えると、今すぐにも着手可能な事柄を検討する事がある。また同時に、大学病院に対する行政監察局の勧告に基づき種々の改善すべき点についても検討を行っている。時を同じくして国立大学の独立行政法人化も視野に入れていることになった。検討すべき課題は従って多岐にわたる。検討事項は、附属病院の理念と目標から社会活動まで大きく七項目になる。

十二人で各々に分担して検討案を提出し、随時検討している。検討事項に關係する事務部員も参加している。

院長指名として任期は院長の任期である。いうまでもないが病院の特徴として看護業務と、その周辺の業務は広範囲でしかも関連する人員が多い。またちやうど文部省も看護婦の業務と看護婦の地位向上を目的として、将来看護部長を文部教官として参加するべく概算要求に出したところである。本稿が出版される頃には具体的な人選が行われていると思われる。リスクマネージメントは昨今の多発している医療事故の反省から、医療事故の予防と防止にある。外国では早くから専門的な事務的処理者が対応するシステムで、本邦ではなじみが薄い。航空機会社が飛行機の保守点検に起こりうるリスクの報告を義務化し、これをインシデントレポートしている。何れも日常起こりうるあらゆる事故を検討する事でより大きな事故を未然に防ごうとする。

考えである。外部委員には弁護士を含む事とした。収支改善策では、行政監察局は国立大学病院に収支を考えた運営を行うよう勧告している。肥大化した大学病院の職員、業務から収支を考えた運営は必ずしも容易ではない。勿論医学生は教育機関であり、青森県唯一の特定機能病院として、また北東北の医療のセンター的病院として運営するには、収入を多く上げることは多くの困難を伴う。しかし、独立行政法人化が決まった現在、何れは独立採算で運営せざるを得ない。多くの困難が予想されるが私は決して、不可能であるとは思わない。種々の点で改善すべき事が山積している事は事実である。効率的な運営も考慮すべきで、実施可能な一つの例として、在院日数短縮のためのデージェリと本年度から行ったクリティカルパス導入

で在院日数は確実に短縮している。効率的運営の検討事項には当然診療科に対する予算の傾斜配分も考えている。適正に施行するため数値を検討中である。各種委員会であるが、現在病院で八十名の委員会がある。勿論必要な委員会は残し、現在不必要な委員会は廃止あるいは統合して委員会数を減らし、関係者の負担を少しでも減らしたいと、ともに計画、立案、実行まで素早く、スムーズに行われる委員会を考えている。卒後臨床研修を特に取り上げたのは、これまで本校卒業生が本学に残るのが少なく、このことが青森県の地域医療に大きな支障を来している。また医療のみならず教員室の不足は臨床、基礎を問わず深刻な研究のパワーの低下を来している。卒業生が残らず、またいわゆるUターンも少ない原因は複合的である。しかし現状で

いけば卒後臨床研修が義務化された暁には、ますます本校残留の可能性は低い。関東・関西方面の臨床研修病院の充実と認定施設は急激に増加しているが、青森県を含む北東北ではその機運はみられない。まずは研修体制の充実と、施設の整備である。関連病院との連携した研修体制を確立したい。本プロジェクトチームでは現在の研修システムの見直しを図り、弘前大学医学部附属病院関連病院との病院群の形成と、既に研修指定病院である四つの病院と部分研修を行う予定である。また施設の指導体制の強化には臨床教授制の導入が必須である。このことについては既存の卒後臨床研修検討委員会とも密接な連携を保ちながら早急に進めている。二十一世紀に向けて患者さん本位の、患者さんに親しまれる魅力ある大学病院にしたい。

(前ページから) れる。」とある。何といっても少子化、医師過剰と財政高負担から医学部の数は多すぎるとの見方がある。独立行政法人化の中で、医学部の統廃合や切り捨てが起る環境作りが着々と進んでいる。ましてや「改革をやらなければならない」が当医学部の特徴だ。「改革を急ぐ必要はない」「時期尚早」「他大学の様子を見てから」といった考えは、当医学部を将来窮地に追い込むことになる。教職員のごく数々の動きは、当医学部に明るい希望を持たせるに至った。医学部の様々な組織・管理・運営の改革は、他大学が目を見張るようになってきた。二十一世紀構想検討委員会のメディアカルスクール構想は現実味を帯びてきた。英文論文投稿数は着実に伸び、文部省科学研究費の採択も向上の兆しを見せている。附属病院の運営も評価が高い。外部資金導入の窓口となる鶴岡医学振興会の法人化も青森県が理解を示し準備が進んでいる。青森県との連携による地域医療に対する見直しが一歩一歩進み始めた感がある。同窓会の医学部支援態勢が強化された。広報誌「医学部ウォーカー」により医学部の様子が手に取るように分かるようになったとの外部からの評価が高い。更なる改革は、独立行政法人化されても医学部の統廃合が進んでも、我々の生き残りを保障するものである。

開設記念式

附属脳神経血管病態研究施設

前大学部 附属脳神経血管病態研究施設開設記念式



良原青森県健康福祉部長による祝辞

脳神経血管病態研究施設の開設記念式が五月二十七日午後三時から医学部コミュニケーションセンターにて開催された。当日は学内外から約八十名の出席を得、新施設の発足を盛大に祝った。

記念式典では、遠藤医学部長、吉田学長の挨拶に続いて、良原青森県健康福祉部長の祝辞を頂いた。最後に松永施設長から、新施設の概要が説明された。次いで、東北大学大学院医学系研究科丹治順教授(生体システム生理学)による記念講演「大脳皮質前頭連合野の最近の研究―運動の認知的選択と随意的選択―」が行われ、高次神経機能に関する最先端の研究成果が紹介された。



特別講演の東北大学 丹治教授

(佐藤 記)

第 二 稿

新評議員に 菅原和夫、鈴木宗平 両教授



菅原評議員



鈴木評議員

新しい評議員に菅原和夫（衛生学）、鈴木宗平（外科学第二）両教授が選出された。評議会は各学部の代表による大学の最も重要な審議機関で、医学部からは両教授のほか、遠藤医学部長、原田病院長が参加される。菅原教授は三期目で任期は平成十三年七月まで、また鈴木教授は新任で任期は平成十三年三月までとなる。新評議員の活躍を医学部全体で支持していく必要がある。（佐藤 記）

医学部・附属病院 外部評価委員会開かれる

外部評価準備委員 佐々木 睦男
（外科学第二講座教授）

本紙第九号で遠藤正彦医学部長からの寄稿記事にもあったように、去る八月十七日第二回外部評価委員会が東京で開催された。今回は五名の外部評価委員とともに各委員が指名した専門委員も六名（委員長指名二名、教育活動担当一名、研究活動担当二名、欠席三名）これらの専門委員は覆面委員として所属・氏名が伏せられる）が出席して行われた。当医学部からは外部評価準備委員会から委員長の遠藤医学部長をはじめ原田病院長、泉井二十一世紀構想検討委員長、神谷学務主任・学事委員長、鈴木（唯）副学務主任・入試専門委員長、佐々木医学部・附属病院自己評価委員長の六名の委員と事務部からは椎名総務課長他二名が出席した。既に第二回委員会開催に先立ち、七月二日に岩淵 眞新鴻大学医学部長（教育活動担当）、七月二十三日川上義和北大前病院長（診療活動担当）、七月二十九日荒川正明新潟大学長（外部評価委員会委員長）、七月三十日佐藤達夫東京医科歯科大学医学部長（研究活動担当）、八月十日久道 茂東北大学医学部長（管理・運営、国際交流担当）がそれぞれ当医学部・附属病院および附属施設等を視察し、学生を含めて関係者からヒアリングを行った。さらに、提出された医学部の活動全般に関連した六十一のほのぼの資料の内容とともに、当医学部附属病院の現状についても各委員の担当分野に関して質疑応答がなされた。

委員会は午前十時から教育活動、研究活動について、午後一時から診療活動、社会活動および管理運営の順にそれぞれ約一時間にわたる各担当委員と専門委員から詳細な質問がなされ、こ

夏期国際交流 派遣学生壮行会



贈呈式で派遣学生を激励する八木橋国際交流研究委員会委員長

例年国際交流の一環として、本学部から外国の大学や医療施設へ学生を派遣している。派遣学生は公募を行ったが、本年度から国際

交流研究委員会委員と本学の客員教授になったポール・ホリスター先生による英会話の面接が行われ決定された。その壮行会が去る七月十三日医学部長室で開かれ、遠藤医学部長から派遣学生への旅費補助金の贈呈などが行われた。また、九月にハバロフスクロシア国立極東総合医科大学からの学生を交換研修生として本学部で受け入れて

いる。

図書館絵画案内（3）

「旧朝陽小学校玄関（旧基礎校舎）」

小泉 十三男

今回の紹介は版画だ。図書館二階の柱面に掲げられている。かつての基礎医学校舎入口である。現在の大黒松小公園向いのヒマラヤ杉に面した第一病理実験室辺りだ。現在の基礎医学校舎が完成した昭和四十三年まで、この木造校舎で基礎各講座がそれぞれ教育研究に勤しんだ。作者は本年本学を退職された小泉氏。在職中は解剖助成者としてまた後に系統解剖職員として医学教育研究を支えた。昭和二十年の青森大空襲で校舎を焼失した弘前大学医学部前身の青森医専が弘前市へ移転し、基礎医学校舎の移転先としたのが弘前市立朝陽小学校であった。そのかつての朝陽小学校（基礎医学校舎）の玄関入口を彫ったものである。生理の佐藤 先生（元医学部長・学長）は「檜御殿」と呼んでいたと聞いている。廊下を下駄で歩くとかタコト大きな音をたて、そ



（図・工鹿）

題、研究を活性化させる点から見た大学院の定員枠や大学院学生の研究の実態について、診療面においては在院日数、剖検率の改善、先進的医療への取り組み、さらには附属病院周囲の環境等についても厳しい指摘と助言があった。

当医学部はその創立当初から卒業生の母校残留率の低さに比べ、地域医療の守備範囲が広大で、ともすれば研究より地域医療に比重が置かれる傾向にあったことも否めない。その結果、学生の目的は魅力的な研究及び診療が不足していると映り、これが学生の残留をさらに低下させる原因の一つとなっている。この事態をブレークスルーして多くの学生を残し、医学部をさらに活性化させるためには優

れた、魅力ある研究と先進的医療の充実が必須である。当医学部・附属病院では二十一世紀において輝く存在であるべく、医学部長のリーダーシップの許に多くの点で改革・改善が進行中であり、その詳細は外部評価委員会に提出された六十一種類の資料の中に含まれている。特に、医学部改革の目玉の一つであるメディカルスクール・メデイカルセンター構想、医学部教員選考法、学生用コンピュータールームの設置、大学院講義用の双方向型テレビ会議システムの導入、優れた動物実験施設と動物実験指針のマニュアル、今回の覆面の専門委員を加えた独特の外部評価方法をはじめ、他大学の注目を集めている

点も少なくない。この意味から当医学部の将来は、まさに現時点における改革の成否にかかっていると云っても過言ではない。外部評価報告書は近々に公表予定であるが、既にヒアリングでも指摘されている研究活動をはじめ、各委員及び専門委員から指摘された点を全教職員が厳しく認識して、改革を実行していくことが重要である。この点に関しては既に外部評価準備委員が、指摘された事項に対して分担して対応することが決定されており、現在、具体的な作業が進行中である。今回の外部評価が真の意味を持つためには近く提出される対応策を早急に実行に移す必要がある。

研究室紹介

神経精神医学講座

「走り続ける」

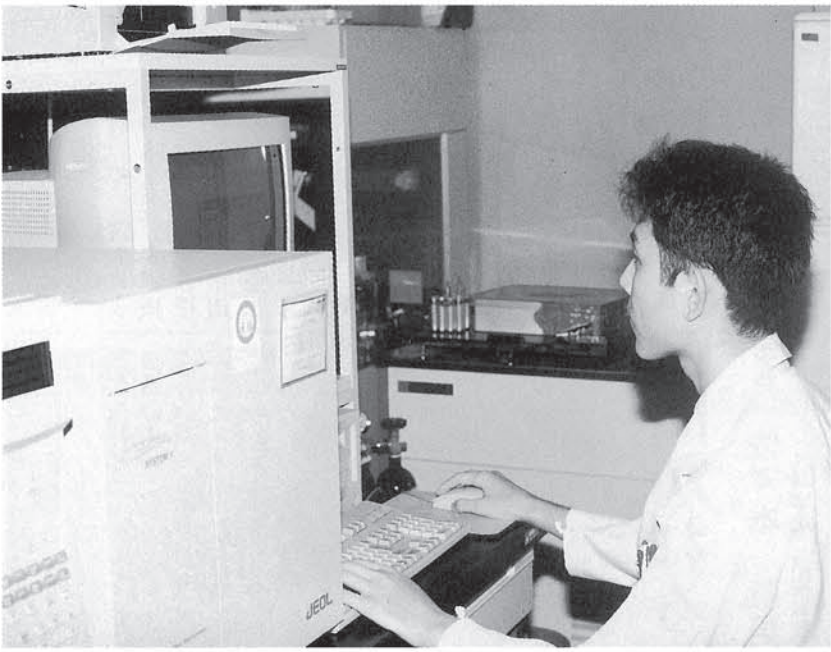
神経精神医学講座教授

兼子 直

神経精神医学的研究へのアプローチ法は他の研究領域と比較するとより多様なといえるでしょう。それは心理学、社会学、精神病理学、神経生理学、生化学、薬理学、神経心理学、神経病理学など多岐にわたり、いずれの切り口からでも疾患の病態や治療の本質に迫ることが可能であり、神経精神医学自体が未だ解明されていない部分が多いためであるかもしれません。しかし、当教室では、解明されていない未知の部分が多いほど本質に迫ってみたいという開拓者精神が旺盛な研究者達が多く、活発な国内外の交流をしながら様々な研究に取り組み、走り続けてきたというのが実感であり、これからもまた走り続けることとなるでしょう。ここで、当教室における研究の現状と課題について簡単に紹介いたします。

てんかん研究

当教室は伝統的に国内有数のてんかん研究機関として認知されてきましたが、その名に甘んずることなく、最近では、遺伝子解析、神経生化学、基礎薬理学の最先端の手法を用いて、てんかんの原因遺伝子解析の全国共同研究を展開し成果を上げつつあり、神経伝達機構とてんかんの病態や抗てん



かん薬の作用機序の解明に向けて意欲的に取り組んでいます。最近になり、本分野の研究には海外からの研究留学生も加わるようになり、学際的交流もこれまでの受身の立場から脱却して、新しい研究の伝道役としての役割も必要になってきたことを痛感します。また、てんかんの具体的な治療指針の確立、予後の改善及びてんかん患者の quality of life 向上を図るべく、てんかんの臨床及び社会精神医学の側面

からの研究も地道に引き継がれ、着実な成果を挙げています。

精神生理学的研究

事象関連脳電位研究を通して、脳情報処理過程を非侵襲的に継続的に観察することに主眼を置き、精神現象の生理学的理解を目指しています。その中でも、非注意条件下の様な聴覚刺激連続中の稀な変化により大脳皮質に誘発される mismatch negativity の存在に注目し、国際共同研究により一定の大きな感覚記憶が関連する Temporal Window of Integration 仮説を提唱するに至り、さらにはその機能障害と精神疾患の病態との関

連に検討を加えております。また、contingent negative variation、P300 の成分解析により精神分裂病における注意障害、認知機能障害を定量的に証明し、本疾患の病態生理の解明に向けての研究も展開されています。

臨床精神神経

薬理学的研究

精神神経薬理学の分野において合理的薬物療法の発展に寄与しうる研究を目指し、臨床から研究テーマを見いだし結果を再び臨床に還元することを目的としています。これまで当教室が力を入れてきた「てんかん」と妊娠の一連の研究の中から問題意識を受け継ぐ形で、抗てんかん薬の催奇性の機序を薬物動態・代謝動態学的に解明する研究が現在も続けられています。一方、向精神薬全般における薬物代謝、薬物相互作用に関する研究も精力的に行われており、最近では、薬理遺伝学的手法を駆使して国際的にも質の高い研究成果を挙げることが可能となっています。また、これまで向精神薬の研究分野の中で重要な問題でありながら未着手であった薬力学的反応性における個人差の問題についても遺伝子変異の観点からアプローチを加え、興味深い結果が得られています。

神経心理・

高次脳機能研究

人間の精神機能や行動と脳機能との関連を解明することが神経心理学の主題であり、これまで、臨床症状と病巣との関連や大脳半球優位の検討、アルツハイマー病に関する臨床的研究、コンピュータを利用した画

平成11年度

文部省科学研究費補助金交付される

— 飛躍への助走、しかし険しい道 —

平成十一年度文部省科学研究費補助金の採択・交付が行われた。弘前大学医学部・附属病院では特定領域研究二件、基盤研究(A)五件、基盤研究(B)十二件、基盤研究(C)二十七件、萌芽的研究九件、奨励研究(A)二十三件、の計七十八件で、配分総額は初めて一億四千八百四十万円であった。図1に見られるように、昨年度の一・七倍と、飛躍的に増加した。文部省の科研費の予算額が昨年度より一・五%増額され

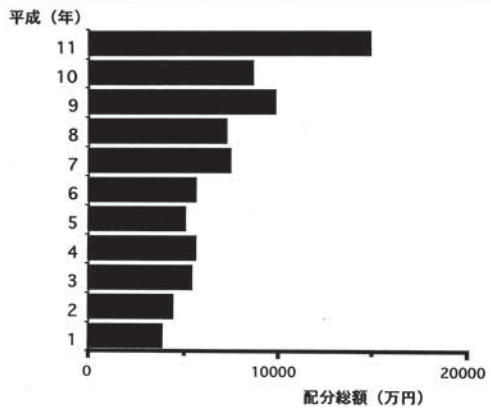


図1 医学部・附属病院における配分総額の推移

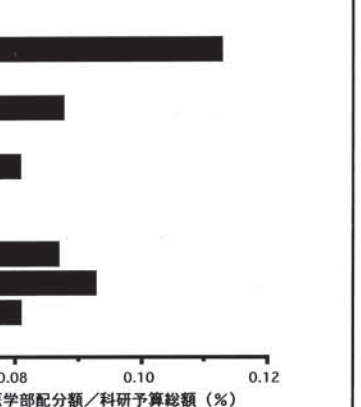


図2 科研予算総額における医学部配分額の割合の推移

2)。採択率をみると前年度とほぼ同一であったが(図3)、これは、申請件数が三十八%増加したためであり、本年度の採択率は積極的に評価すべき数字である。しかし、全国レベルで見ると、国立大学医学部四十二校のなかで、採択件数は三十一位、採択率は三十九位と、低迷状態から脱却していない。平成十一年度の科研申請時期が近づいている。各教官の現況の正確な把握とためまぬ努力が望まれる。

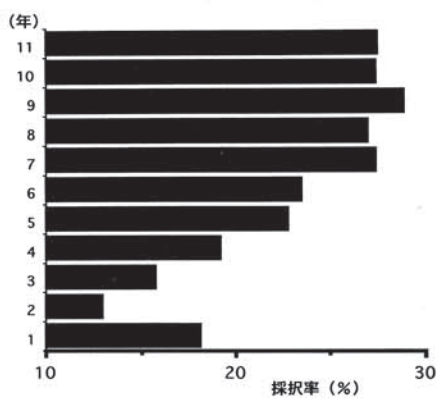


図3 医学部・附属病院における採択率の推移

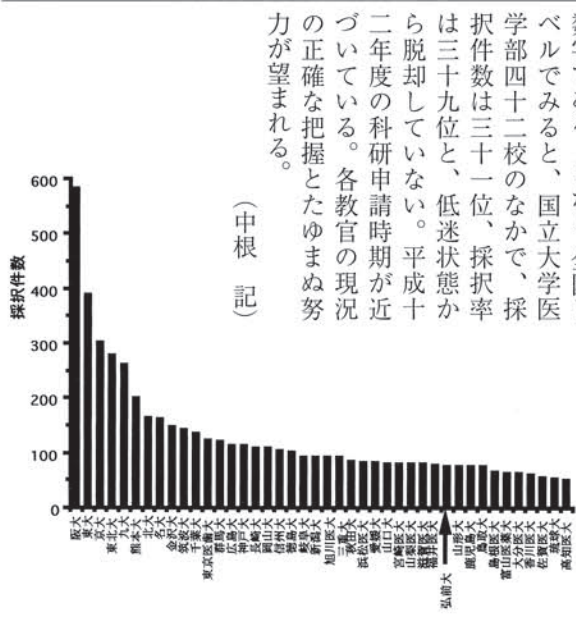


図4 国立大学医学部・附属病院における採択件数

児童・

青年期精神医学研究

現在、様々な社会現象ともなっている児童・青年期の問題に対応すべく、平成十年四月より当教室では児

像データの集積とその応用、症状や病巣と予後との関連の解明など多くの成果を残してきました。現在、脳血管障害に伴う失語症をはじめとする高次脳機能障害の研究が継続されており、家族性アルツハイマー病の大家系の経過観察及び治療の中から国立精神・神経センターとの共同により原因遺伝子など病因を解明する試みも行われています。一方、視覚失認、相貌失認、純粋失読などの視覚認知障害の詳細な検討をすることにより、視覚認知のメカニズムの解明も目指しています。

ファカルティ・ ディベロップメント が開始される

学務主任 神谷 晴夫 (寄生虫学講座教授)

ファカルティ・ディベロップメント (Faculty Development, FD) は、授業能力の開発、教員の授業内容方法の改善、向上への組織的取り組みを意味している。「二十一世紀の大学像と今後の方策について」競争的環境の中で個性が輝く大学の中で、「良い研究者は自動的に良い教育者である」と言う従来の一般的考え方を、「良い教育者は、良い研究者でなければならない」というコンセプトへの転換が示唆されている。しかし、大学教官は、教育・研究だけがその業務ではなく、学内の管理運営、学識を介しての社会的奉仕の役割も担っている。当医学部のFDは、他学部と先立って、五月十日、十一日の両日、医学部教員研修会の名称で実施された。要参加該当者は、本年四月中に採用された二十一名で、

受講者の十九名は全員助手であった。その研修制度の内容は、(一) 国家公務員としての教員の服務に関する事項(二) 兼業に関する事項(三) 教員任期制に関する事項(四) 自己点検評価に関する事項(五) 学生の授業方法に関する事項があげられて



教員研修会で挨拶する遠藤医学部長

いる。初日には、医学部長、病院長から、それぞれ「弘前大学医学部の現状と課題」、「弘前大学医学部附属病院の現状と課題」の基調講演から始まり、総務課長より、「教員の服務規程(1)勤務時間、(2)兼業」、「医学部組織」について、管理課長より、

「研究費、旅費、物品管理等」について説明があった。翌日には、弘前大学教育学部村山正明教授から「教育概論」、同じく教育学部平岡恭一助教授から「教育心理」、医学部附属病院医療情報部長羽田隆吉教授から「情報管理」についてのご講演をいただいた。二日間にあたる濃密な内容の講演・説明であったが、主に服務規程に関する部分と、教育・授業方法改善に関する部分を同じ研修会の中で取り上げるのは、少々消化不良の感無きにしもあらずで、今後のFD改善の余地がありそうである。尚、五月一日以降、次回のFD開催日までに採用された教員を対象に第二回目が予定されている。

成績表

		得失点差
優勝	6階連合 (衛生、公衆衛生、寄生虫)	5勝1敗 (+43)
準優勝	第一生化	5勝1敗 (+18)
第3位	4階連合 (第一・第二生理、薬理)	4勝2敗 (+6)
第4位	基礎事務	3勝3敗 (+19)
第5位	細菌・法医連合	2勝4敗 (-13)
第6位	第二生化・第二病理連合	2勝4敗 (-35)
第7位	新脳研連合	0勝6敗 (-37)



(蔵田 記)

平成11年度 動物慰霊祭挙行

附属動物実験施設長 神谷 晴夫
(寄生虫学講座教授)



平成十一年五月二十五日、医学部大講義室において動物慰霊祭が執り行われ、医学部教官、学生、職員約二〇〇名が出席し、動物実験に供された多くの動物の霊に感謝の気持ちを捧げた。今年度は、東北大学大学院医学系研究科附属動物実験施設長笠井憲雪教授による「動物実験における動物福祉のあり方」の記念講演がなされた。動物実験倫理に関わる具体的事例から、最近の動物実験を取り巻く動向、そして、国際的にも動物実験倫理に対して、今後取り組むべき方向性にまで言及され、示唆に富んだご講演

であった。この記念講演は、過去三回連続して、今年以上に動物実験を行っている研究者の参加を是非お願いしたい。今迄のそれぞれのご講演は次のとおりですので、改めてご一読頂きたい。

- 前島一淑 「動物実験と研究者の責任」 弘前大学医学部附属動物実験施設報告書第四号
- 佐藤徳光 「医学研究と動物福祉」 附属動物実験施設ニュース七号
- 鬼頭純三 「現代生命科学における動物実験のあり方」 附属動物実験施設ニュース九号

尚、笠井教授の今回のご講演は、動物実験施設ニュース十号に掲載される。

じゃんけんて優勝決定 —基礎ソフトボール大会—



医学会館で優勝祝賀会に先立って行われた決定戦の様子

本年も医学部長杯争奪基礎ソフトボール大会は六月二日から七月十六日にかけて南郷グラウンドで行われた。今年から新脳研チームが新たに加わり、七チームで学部長杯が争われた。

七月十六日に予定されていた第一生化と四階連合との最終試合で、そこまでは優勝、負ければ六階連合との決定戦が行われるはずであった。ところが前日から雨でグラウンド不良のため、試合は中止となり、同日の最終試合後直ちに予定されていた祝賀会の席で、じゃんけんによる優勝決定戦が急遽行われた。優勝決定戦のじゃんけんはボジション別に行われ、まず第一生化と四階連合との対戦では四階連合が勝つてしまい、優勝決定は第一生化と六階連合との対戦に持ちこまれた。結果は六階連合の優勝となったが、その後の祝賀会とともに最高の盛り上がりを見せ、教室親睦という点からはその役割を十分に果たしたといえよう。

学部説明会開催

―本学志望の高校生に向けて―

去る八月十八日午後、平成十二年度に本学部の受験を志望する高校生並びに高校進路指導教員を対象として学部説明会が開催された。この説明会は今年で三回目になるが、当日、地元弘前高校の学校行事が重なったため、参加者は例年より少ない四十四名であった。

参加者の内訳は津軽地区二十四名、青森地区三名、八戸地区六名、下北地区二名、北海道二名、秋田県二名、岩手県三名、宮城県二名であった。津軽地区ばかりでなく県内外からも比較的多くの参加者があり、説明会は医学部を志望する学生にとって医学と医療の現場を実感出来る機会として非常に有意義なものとして再認識された。当日十二時三十分から、事務職員の方々が臨床研究棟玄関で受付を開始した。出席者に配布された今年度の大学案内は、「二十一

世紀を夢見る君へ」というサブタイトルがついた非常にカラフルなもので、医学部の頁も格調高かつ解り易いものであった。初めに全員が臨床大講義室に集合し、入試委員長の泌尿器科学講座鈴木唯司教授から簡単な説明を受けた後、遠藤医学部長から弘前大学医学部の現況と受験生への期待が熱く語られた。その後、外科学第二講座佐々木睦男教授の模擬講義が肝移植をテーマに行われた。先日、本院として八例目の生体部分肝移植手術が施



佐々木教授による模擬講義

行されたばかりだったので、学生は多に興味をもった様子であった。講義終了後、学生は三班（手術部、薬剤部、生理学第一講座）に分かれて、医学部と附属病院を見学した。手術部の見学は第十手術室の手術の様子を天井の見学室から見るというもので、手術に関する知識は全く無いにしても参加者には印象が強く残ったものと思われた。薬剤部の見学は病院一階と地下一階の薬剤部門を職員の見学を受けながら熱心に見て回った。生理学教室の見学では、泉井教授が医学部の学生講義と同様、黒板を使って熱心に教えている姿は感動的なものであった。

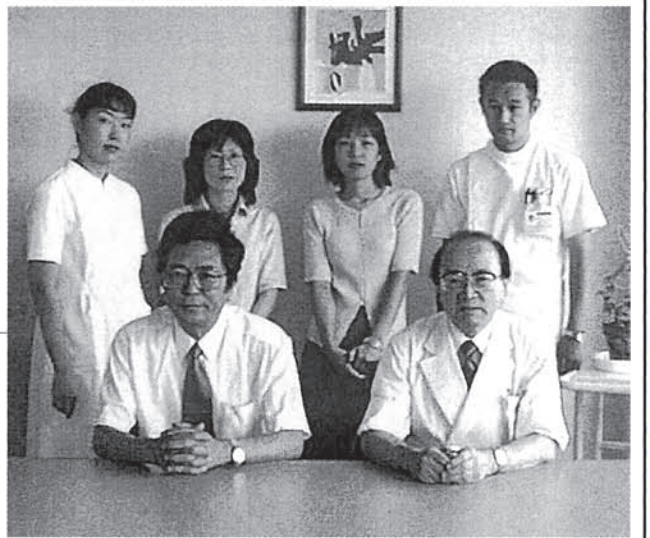
三班に分かれた医学部・附属病院見学が終了後、再度臨床大講義室に集合し、質疑応答がなされた。真夏の非常に蒸し暑い午後であったが、参加者はそれぞれ満足感と共に来春の期待と不安に満ちた表情を漂わせながら三々五々家路についた。記者は初めてこの説明会の様子を見ることになったのだが、参加者の熱意と共に準備と実施にあたられた関係者各位の御努力が感じられる汗だらけの半日であった。

(木村 記)

治験事務局発足

治験在り方委員会委員長 兼 子 直
(神経精神医学講座教授)

一九九一年以来、共通した基盤で医薬品の開発を行い、各国間で試験データの利用が可能となるよう、「医薬品の臨床試験の実施に關する基準」について日米欧三極間で協議していたが、



前列左から、佐藤さん（学務）、菅原教授（薬剤部）、後列左から池田さん、花田さん、荒関さん、工藤さん

一九九七年に「医薬品の臨床試験の実施の基準」（新GCP）を改正し、一九九八年からこれが完全実施となった。これを受けて、本学附属病院でも一九九八年七月に「治験の在り方検討委員会」が発足し、大学附属病院の独立法人化も視野に入れた

(写真)

手術場天窓からの見学



新GCPでは表1のよう

に、問題発生時の処罰対象が明確化（法制化）され、治験契約、治験参加契約などの契約関係も明確化されている。また、診療情報の医療機関外への持ち出しが許可され、治験依頼者側の守秘義務が発生した。これらの改革は治験対象者の人権の保護だけではなく、関係者の責任を明確にし、さらには治験の質を高めようとしたものである。しかし、一方ではこの新GCP下での治験が厳しいこともあり、海外へ治験が流出し臨床試験の空洞化が進行する危険性もはらんでいる。実際に、一九九七年度は一九九六年度に比較し治験症例が四〇%

減少している。そのため、治験事務局の積極的な活動が期待されるわけであるが、幸いにも本学では臨床薬理学講座が近く発足するため、同講座の全面的な協力を仰ぎこれらの問題に対処して行きたい。また、治験を推進するため、治験実施委員会では被験者となったときのメリットを検討しており、厚生省でも本年十月から一回の外来受診に対して交通費として七、〇〇〇円を支払うことを決めている。

治験実施に重要な役割を果たすCRCは、現在、幾つかの診療科で、CRC業務の試行を重ねつつ、治験実施前のスタッフへの説明会を実施し、治験関連資料の管理などの治験実施体制を整備している。本年九月以降は、契約前の業務体制を検討するため、一般の診療科の契約前の治験についても係わる予定である。

その他、現在の治験事務局の検討課題としては、当院が全国の治験管理システム検討の代表校七校の内の一校であり、今年度より治験管理システムを稼働させること、治験の広報、治験協力スタッフへの教育・啓蒙、被験者への緊急時の対策、検査体制の整備など、問題は多い治験事務局の船出ではある。

表1

新GCPの改革のポイント

- 1 治験総括医師の廃止→責任医師の導入（強力な指導力）
- 2 被験者に対するインフォームドコンセントの文書化
：患者の意志決定に影響を与えられる情報はすべて開示
- 3 IRBへの外部非専門家の参加
- 4 治験に関する情報公開
- 5 治験費用の支払いを含めた製薬会社と治験担当医師の関係の公正化
透明化の確保
- 6 治験データの信頼性の確保（症例数の確保、モニタリング・監査等）
- 7 企業責任の明確化：直接閲覧

医学部公開講座 『医学・医療の最前線』 開講される

医学部公開講座推進会議委員長

木村博人 (歯科口腔外科学講座教授)



受付の様子

去る八月二十日より九月十日まで、医学部メディアカールコミュニケーションセンターを会場に、平成十一年度医学部公開講座が実施された。公開講座のメインテーマは、平成九年度は「老いを考える」、平成十年度は「続・老いを考える」であったが、今回は「医学・医療の最前線」とし、以下の日程で合計七回開講した。

第一回：八月二十日（金）「医療と麻酔の進歩」松本明知教授（麻酔科学講座）、第二回：八月二十四日（火）「臓器移植の現状―肝臓癌と肝臓移植―」佐々木睦男教授（外科学第二講座）、第三回：八月二十七日（金）「頭痛と脳の病気」鈴木重晴教授（脳神経外科学講座）、第四回：八月三十一日（火）「生殖医療技術の進歩」藤井俊策講師（産科婦人科学講座）、第五回：九月三日（金）「アレルギーの治療」松原篤

講師（耳鼻咽喉科学講座）、第六回：九月七日（火）「白内障と眼内レンズ」桜庭知己講師（眼科学講座）、第七回：九月十日（金）「消化器内視鏡技術の進歩」棟方昭博教授（内科学第一講座）。

今回の公開講座は、受講定員八十名、受講料五、四〇〇円であったが、一人でも多くの受講者が得られるよう、市民広報等を通じて広報活動を積極的に行った結果、受講希望者の人数は六十名（男性十八名、女性四十二名）と、昨年度四十名に比べ二十名の増であった。また、受講者の大多数は弘前市並びに周辺市町村に在住する方々であったが、青森市在住五名、八戸市在住一名と遠方からの受講者も居り、一般市民の生涯学習意欲の高さが伺われた。

開講初日には、遠藤医学部長から医学部公開講座の意義について挨拶があり、推進会議木村委員長から受講に

サークル紹介

空手道部

大滝

潮（医学部四年）

弘前大学医学部空手道部（部長元村成業理学教授）は一九九七年に、佐藤央先生（平成十年卒）により設立されました。今年で三年目を迎えます。現在部員は男子八名、女子四名、計十二名です。全学にも空手道部はあり組織としては別ですが、学生レベルでは盛んに交流し切磋琢磨しています。創部当初たったの三名で出場していた東医体も、昨年に引き続き今年（長野県）も全種目に出場できるようになり、さらに今年は若手の活躍により男子団体ベスト八

際しての心得（要するに積極的かつ気楽に聴講すること）が話された。引き続き、松木教授の講義に移ったが、軽妙洒脱な話しぶりに受講生は大いに感銘を受けた様子であった。八十分の講義時間の後、受講生から盛んに質問が飛び出していったが、松木教授の言い含めるような丁寧な回答振りが印象的であった。第二回目以降も、最近頻繁に（良きにつけ悪しきにつけ）医療関係のニュースがマスコミを賑わせているせいか受講者の聴講態度は素晴らしく、医学部学生はこれを範とし医療従事者としての自覚をより高めるべきではないかと感じられた。今回、受講者に配布されたテキストは内容、体裁共に前年度より改善され、受講料に相応しいものである。また、学務課職員の

時、空手は「唐手」と書かれていました。その後、日本国中に広まっていくうちに「空手」となり、又、伝承者によっていくつかの流派に分かれました。これらの流派はそれぞれスタイル・ルールが異なりますが、これらの流派が集まって統一ルールを決めたのが全日本空手道連盟（全空連）というものです。東医体はこの全空連ルール（いわゆる寸止め）で行われます。又、空手道の試合には形・組手という二つの種目があります。形とは一つの決まった技の連続で指定形・得意形を演武することによって点数制（体操やフィギュアスケートのよう）で競うものです。組手とは一対一で対戦し、相手の特定部位に技を決めることによって三本勝負（技有り二つで一本）で競うものです。とまあ難しいことはこれくらいにして、実際の試合では、「自分との戦い」と「相手との駆け引き」が面白い所です。限られた時間・空間の中でいかに惑わされず自分の技を発揮するかが、また「気持ちで負けないこと」も重要です。そう考えてみると、人との交わり方と重なる部分も多く、空手道を通して精神的に成長するのではないかと思います。そんな緊迫感も試合の間だけ、道着を脱げば皆素朴な大学生です。青森県内出身者が最も多く、次いで西日本出身が多く、関東圏の学生がほとんどいないせいいか、何ともあかぬけない集団です。独自の調査結果によりますと、携帯PHS所有率八三・三％・車所有率五八・三％・クーラー所有率三三・三％・恋人がいる率七五・五％・金髪率一六・六％・薬理学再試験率九九・九％・写真部率二五



今年の東医体は信州で行われました

* 空手道部随時部員募集中 *

医学部生・医療技術短大生

活動：火・木17:30~19:30 土12:00~15:00

文京キャンパス武道場

連絡先：大滝（4年）32-4403

花田（2年）37-5767

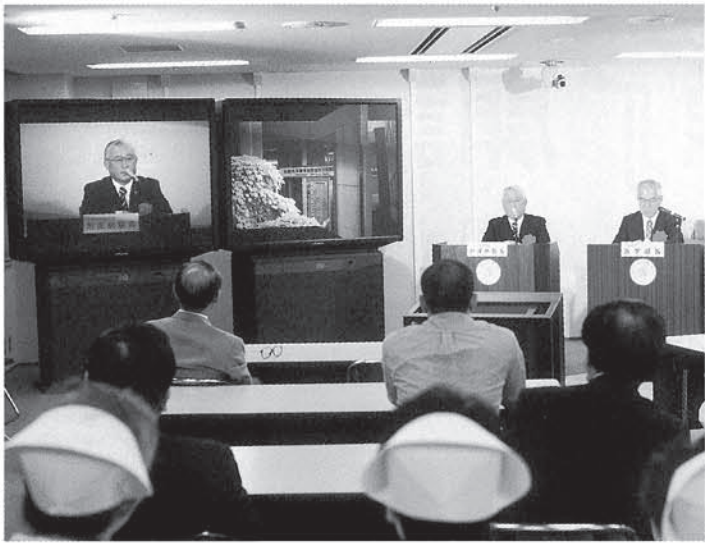
〇％・麻雀できる率七五・〇％・楽器（ギター・ベース・ピアノ等）所有率四一・六％・フラメンコ率八・三％・鈴木あみファン率八・三％と時代を反映しつつも、多彩な趣味を持つ人が多いです。今年から、東医体・東日本女子医療系学生大会に加え、新たに新潟大・山形大との三校定期戦を行い、さらに秋には若手医大との交流も予定されています。三年前に比べ、活動の幅も広がり部員不足で一人ひとりの負担が大きく辛い面もありましたが、薬理学再試験の低下とともに部員の確保は今後の大きな課題です。まだまだ未熟な空手道部ですが今後とも、温かく見守ってください。そしてこれからの空手道部にこう御期待!!

大学病院衛星医療

情報ネットワーク 第一回放送行われる

昨年度の補正予算で本医学部附属病院に導入された大学病院衛星医療情報ネットワーク（Medical Information Network by Communication Satellite for University Hospitals, MINCS）による記念すべき第一回放送が七月十六日にネットワーク室（附属病院1階）で行われた。同時にMINCSが導入された山口大学医学部附属病院などを結んで、本医学部附属病院がデジタルハイビジョンによる放送を発信した。

当日の放送ではMINCS運営委員会委員長の阿部教授が司会となり、吉田豊学長と遠藤医学部長の挨拶に続いて、原田病院長による記念講演が行われた。記念講演では美しいビデオやスライドを使いながら、弘前大



原田病院長による講演会風景

学における医学・医療のありかたや、諸問題に対してどのように取り組んでいるかが具体的に紹介された。記念講演終了後、山口大学医学部の学部長や病院長をはじめとする方々と、大学における活性化や地域における医学・医療のありかたなど、活発な質疑応答が行われた。放送は約一時間行われ、大きなトラブルもなく極めて順調に行われたが、これは羽田教授をはじめとする医療情報部スタッフや事務部の入念な準備と協力の賜物である。今後は年間少なくとも二回以上の放送を行っていく予定であるが、本システムの有効活用に大いに期待したい。

（蔵田 記）

弘前医学 表紙刷新される



弘前医学は創刊五十周年を迎え、これを機に第五十一巻から表紙が新しくなることになった。新しい表紙のデザインは公募され、募

集されたものの中から医学部四年の本田哲史君らのグループによる色彩豊かなデザインが最優秀賞として選ばれた。最優秀賞の表彰

青森県医師修学資金修学生募集案内

青森県では、青森県医師修学資金貸与条例に基づき、将来県内の病院等に勤務しようとする医学生に対し、修学資金を貸与します。

1. 募集対象者

県内出身者の医学生で、将来県内の病院等に医師として勤務しようとする方10人以内

2. 募集期間

平成11年4月15日（木）～5月6日（木）（必着）

3. 貸与の内容等

- (1) 貸与の額 月15万円入学した月は27万5千円を加算
- (2) 交付の方法 毎月、本人の指定した銀行口座に振り込みする。（ただし、平成11年4月分から5月分については、6月に交付予定）
- (3) 貸付期間 契約した月から大学を卒業する月まで（正規の修学期間に限る。）
- (4) 貸付利息 無利息
- (5) 卒業後、県内の病院、診療所、大学医学部へ、貸与期間の1.5倍勤務した場合には返還債務を免除します。

4. 募集要項の請求先

〒030-8570 青森県健康福祉部医務業務課医務指導班
電話0177-34-9288

各大学医学部学務課

5. 制度等のお問合せ先

〒030-8570 青森県健康福祉部医務業務課医務指導班
電話0177-34-9288

青森県出身医学生 への修学資金貸与 制度実施

青森県における医師不足の改善をめざして、県は「青森県医師修学資金貸与条例」を制定し、平成十一年度より実施している。貸与対象は本学医学部学生に限定しておらず、他道府県において学んでいるすべての青森県出身医学生を対象としているため、近い将来医師のＵターンが促進されることと期待される。県と同様に当医学部としても県内医師の充足をはかることはき

わめて重要な問題であると認識している。このため医学部では数年前より本学出身で他道府県へ流出した医師の呼び戻し、卒業生の県内定着の増加などに努めている。この修学資金貸与制度が一つの核となり、県内の医師不足が早期に改善されることが望まれる。平成十一年度募集要項と青森県医師修学資金貸与条例は左記の通りである。

（新川 記）

医学部学生用コンピュータ室を利用して



医学部四年 井上 秀二

私達四年生は、医学概論の講義時間（二コマ分）を使い、医学部学生用コンピュータ室を利用してました。目的意識をもって長時間利用した訳ではありませんが、一利用者としての感想を簡単に書きたいと思っています。

講義中に基本的な部屋の使い方を説明していただきました。教室にはいくつかのディスプレイがあり、その画面を見ながら講義を受ける形でした。私はその時に、教室の前方に座り

ました（教室というものは後ろから埋まっていくものである。遅く入るとこうなってしまう）。この席からは一番前の大きなディスプレイを見ることになりましたが、目の前のモニターでディスプレイが隠れてしまっている感じがしました。

ディスプレイを使って講義する時はもう少し工夫が必要だと思っています。

文献検索法の講義を受ける医学部四年生

遠藤医学部長から賞状を受け取る本田哲史君



式は五月二十一日に医学部コミュニケーション・セッションセンターで弘前医学創刊五十周年記念式の中で、遠藤医学部長から賞状と副賞が授与された。なお新しいデザインによる弘前医学は、各教室の英文レビューを特集した記念号として九月中旬に発行される予定である。

（蔵田 記）

また、教室内での私語やパソコンの音量はどのように制限されるのでしょうか。個人的には、休憩所のような気分が騒がれるのは迷惑ですが、必要な会話は認めてほしいです。インターネット上の音情報などはイヤホンなどを付けてマナーを守るべきでしょう。まだ本格的に利用したことがないので、どのようなソフトが使えるのか分かりませんが、あのような設備が整うということは本当に嬉しいことです。特に、インターネットのダウンロードのスピードの速さには全くストレスを感じませんでした。一日も早く使えるようにと願っております。

第四十回日本心身医学会総会並びに 学術講演会を終わって

弘前大学保健管理センター教授 佐々木 大輔

六月三日(木)、四日(金)の両日、日本医学会総会の分科会として、第四十回日本心身医学会総会並びに学術講演会を弘前で開催する機会を頂きまして、無事終了することができました。不況の中、財政的には厳しいものがありましたが、スリムな学会運営を心がけました。本学会の弘前での開催は昭和四十六年八月に松永藤雄先生が第十二回日本精神身体医学会総会(現在は日本心身医学会総会と改称)を主催されて以来であ

ります。今回は会場をホテルニューキャッスルと、昨年四月に新築なった弘前商工会議所会館で七会場を使いまして。両会場は道路一つ隔てたのみで、また学会当日は好天にも恵まれましたので移動が容易で概ね好評でありました。学会参加者は心療内科医、精神科医をはじめ歯科をも含めた臨床各科の心身医学の研究、臨床の従事者、臨床心理関係者、およびコメディカルの方々であり、基礎から臨床まで幅広い分野からの報告がありました。学会の基本テーマは「心身医学の新たな展開を探る」とし、これからの心身医学の発展に寄与しうるであろう意欲的な報告を募りました。応募演題数は約三〇〇題が集まりました。シンポジウムIは「大学生のメンタルヘルスと心身症」としました。保健管理センター

告がありました。学会参加者は約八〇〇名で、弘前市内の宿泊施設はほぼ空きがない状況でありました。弘前周辺の宿泊施設の状況からみてこれ以上大規模の学会開催は難しいかと思いましたが、学会の新たな展開を探る」とし、これからの心身医学の発展に寄与しうるであろう意欲的な報告を募りました。応募演題数は約三〇〇題が集まりました。シンポジウムIは「大学生のメンタルヘルスと心身症」としました。保健管理センター



なっていることが多くあることからあります。シンポジウムIIは「心療内科領域における短期心理療法の展開」であります。solution focused approachを中心とした新たな心理療法の登場は将来の発展を予感させる討論がありました。パネルディスカッションでは産業精神保健と生活習慣病、ワークシヨップでは小児と老年の心身医療をとりあげ、当該分野での多くの成果を得ることができました。招聘講演ではサウスカロライナ大学のBullenger教授からパニック障害とSSRIについての講演がありました。SSRIは日本では約一週間前に発売されたばかりであり、時宜を得たお話を聞くことができました。特別講演は国際日本文化センターの

河合隼雄氏から「心身相関について」の講演と、東北大学文学部の大橋英寿教授の「津軽と沖繩のシャーマニズムにみる癒し」がありました。河合氏はユング心理学の大家でありユング心理学を基にした心身相関の解説がなされました。大橋教授の講演ではイタコとユタについての興味深いお話が伺えました。その他、二題の教育講演、一題の特別講演といささか盛りだくさんでありましたが、講演が行われました。一般演題では摂食障害の演題が多く、四十六題にのぼり神経性食欲不振症、神経性過食症がいくかに心身医学の臨床で問題になっているかを物語るものと言えます。会長講演は「消化器心身症とともに歩んで」としましたが、吉田学長

が座長の労をお取り下されました。私のこれまでの消化器心身症についての研究の歩みの一端を紹介しましたが、松永先生、吉田学長、川上 澄先生をはじめ多くの先生方による心身医学、特に消化器心身症の研究、臨床の歴史のあることが誇りであります。なお、五日(土)には心身医学講習会と、一般市民を対象とした市民公開講座(山野美容芸術短期大学 中村延江教授)も開催しました。

第十九回日本静脈学会総会を主催して

外科学第一講座教授 鈴木 木宗平

津軽では緑が最も美しい六月初頭、三日、四日に弘前文化センターで、私が会頭として第十九回日本静脈学会総会を主催致しました。一〇一題の演題応募があり、特別講演二、シンポジウム三、ワークシヨップ一、教育講演二、ランチョンレクチャー二、他に一般演題、という構成になりました。米

国における静脈学の分野で若手の権威、Mayo Clinic 外科のP.Gloviczki教授にインターベンションについて、日本静脈学会の創設者の一人、三島好雄東京医科大学名誉教授に静脈学の歴史と将来の展望についての特別講演をお願い致しました。シンポジウムは「インター

ベンション」肺塞栓症「静脈内腫瘍栓」、ワークシヨップは「下肢静脈瘤」について、活発な討論がなされて大きな成果が得られました。本総会の担当が決まった当初から、私は本学部関係者にお二方のご講演を念頭に置いておりました。そのお一人、佐藤敬教授にはご専門の「血小板活性化因子」のテーマで教育講演をしていただき、内科、外科、放射線科、形成外科、脳外科、病理学、生理学など広い分野の聴衆が熱心に聴講して、文字通り教育講演にふさわしい立派なものでした。もう一方の安達實先生(医・六回生)は第一外科の私の先輩で、一九六三年から米国に

留学して途中三年の帰国をはさんでペーラー大学で人工心臓の研究、心臓血管外科の臨床に従事の後、Cleveland Clinicで外科のチーフレジデントまでつとめられ、一九七七年からクリブランドで血管外科を個人開業、Maymount Hospital血管外科部長を併任されております。「米国での血管外科開業二十二年の経験」と題するランチョンレクチャーで、豊富な実験を基にしたお話をされて参加者に深い感銘を与えられました。もう一人の教育講演は病理学、ランチョンレクチャーは内科、と、静脈学の幅を広げたいという主催者の考えを推し進めた学会となり、恒例となつていく会頭講演も「脈管外科の広がり」と題して、医学・医療が益々、細分化、専門化、個別化して行く現状を考え直そう、という持



ランチョンレクチャー 安達 實先生(本学昭和35年卒)

論が内容になりました。本学部関係者の方々にも座長、演者としてご参加いただいたほか、いろいろのご厚情を賜りました。また、懇親会には、ご挨拶をお願いした遠藤医学部長をはじめ何人かの本学部教授、先生方のご出席をいただきましたが、そのようなご厚意とご協力を指して、幾人かの他学教授から「弘前大学は本当に羨ましいほど素晴らしい雰囲気ですね」といわれたことをご披露して御礼とさせていただきます。

今回の学会総会に弘前大学、弘前大学医学部第一内科、青森県、青森県医師会および関連企業等から多大のご援助、ご協力を頂きました。紙面をお借りして深甚の感謝の意を表します。

化因子

佐藤 久昭



会頭講演

「脈管外科の広がり」と題して、医学・医療が益々、細分化、専門化、個別化して行く現状を考え直そう、という持

「脈管外科の広がり」と題して、医学・医療が益々、細分化、専門化、個別化して行く現状を考え直そう、という持



ランチョンレクチャー 安達 實先生(本学昭和35年卒)

コラム

医学部 こぼれ話

◆学期末試験終了後、学生が試験の結果をしばしば聞きにきてうるさくて仕事もできないから、教授室入口に「試験に関する質問には答えられないので、そのような用件の方はノックしないように」と張り紙をした。学生達はこれの張り紙をみて廊下でガヤガヤいってしたが、やがて静かになった。しばらくして電話が鳴る。電話の中で学生曰く「部屋のノックをしてはいけないと書いてあったので、電話なら良いと思いま

した。ところで私の成績はどうだったでしょうか。」

◆ある教室で、「クイズ100人に聞きました」というやつをやった。「宝くじで一億円あたったかどうかですか。」という質問に、「教室に寄付します。」が一票、「彼女にダイヤモンドの指輪をあげる。」「無人島を買う。」「また宝くじを買う。」等は可愛くて、約半数が「教室をやめます。」翌日から教室にこない。であった。

弘前国際医学フォーラム 第3回学術集会開催にあたって

第3回学術集会実行委員長 佐々木 睦男 (外科学第二講座教授)

来る十月十九日医学部コミュニケーションセンターにおいて弘前国際医学フォーラムの第三回学術集会が開催される。今回は第一回の二十一世紀の細胞生物学「分子レベルから見た細胞の動き」(実行委員長八木橋操六病理解第一講座教授)、第二回分子医学シンポジウム(実行委員長橋本功皮膚科学講座教授)について三回目の開催である。実行委員長は鈴木宗平教授(外科学第一講座)、鈴木唯司教授(泌尿器科学講座)、中根明夫教授(細菌学講座)、原田征行教授(整形外科科学講座)、松木明知教授(麻酔科学講座)、棟方昭博教授(内科学第一講座)、横山雄教授(小児科学講座)、佐々木の八名で、テーマである「移植医療」について欧米から六名の著名な研究者の講演が予定されており、その成果

が期待されている。二十一世紀の医療は臓器移植と遺伝子治療に大きな期待が寄せられており、この時期に遺伝子治療を含む移植医療について世界的に著名な方々と情報を交換することは極めて意義のあることと思われる。この弘前国際医学フォーラムは財団法人弘仁会からの国際交流基金を基に、各方面からの支援により平成九年から開催されており、学術の国際交流に大きく貢献している。今回のプログラムは五つのセッションに分かれており、幹細胞移植、分子生物学、臓器移植、「拒絶反応、再灌流障害」、臓器移植、「肝・脾移植」、移植と精神医学からなり、招待講演者としてはLlanaga教授(カリフォルニア大学)、Johnson教授(ノースカロライナ大学)、Ronai教授(マウントサイナイ病院)、Iwata教授(南カリ

フォルニア大学)、Fung教授(ピッツバーグ大学)、Suman教授(ハーバード大学)の六名が予定されており、それぞれの専門分野から移植医療の最新の話題が提供される。さらに、学内から十四題の口演と二十題のポスター発表が予定されている。これら学内からの発表は、平成九年に青森銀行からの助成金をもとに組織された弘前大学臓器移植研究班(班長横山雄教授、副班長棟方昭博教授)においてなされた業績が主なものである。第三回は十月十八日(月)の歓迎レセプション、十九日(火)の学術集会および送別レセプションの日程で行われることになっており、その成果が期待されるところである。尚、読者各位の参加も大歓迎です。

The Third Meeting of Hirosaki International Forum of Medical Science Symposium on Transplantations October 19, 1999 Hirosaki, Japan



弘前国際医学フォーラム第3回学術集会 移植医学シンポジウム

日時：1999年10月19日(火)

会場：弘前大学医学部

コミュニケーションセンター

Jointly Sponsored by

Hirosaki University School of Medicine

Aomori Prefectural Central Hospital

National Hospital Hirosaki

Aomori Prefectural Medical Association

Hirosaki City Medical Association

Alumni Association of Hirosaki University School of Medicine

Secretariat

Second Department of Surgery

Hirosaki University School of Medicine

5 Zaiji-cho, Hirosaki 036-8562, Japan

Phone: +81-172-39-5079

Fax: +81-172-39-5080



事務局
〒036-8562
青森県弘前市在道町5番地 弘前大学医学部第2外科
Phone: 0172-39-5079 Fax: 0172-39-5080

人事異動

●医学部

辞職

11・7・31

皮膚科学 助教

澤村 大輔(市立函館病院)

転出

11・6・1

耳鼻咽喉科学 助教

宇佐美真一(信州大学医学部 教授)

採用

11・8・1

皮膚科学 助手

熊野 高行(医員)

昇任

11・7・1

公衆衛生学 講師

清野 景好(医学部 助手)

形成外科 助教

四ツ柳高敏(附属病院 講師)

11・8・1

皮膚科学 助教

玉井 克人(附属病院 講師)

泌尿器科学 講師

第二三〇回

弘前医学例会

第一三〇回弘前医学例会
会が十月二十九日(金)午後一時から、弘前大学医学部臨床講義室で行われる。今回は学内外から寄せられた一般演題十九題の発表と、パネル・ディスカッション「癌治療はいま」が行われる。パネル・ディスカッションの司会は阿部由直教授(放射線医学)と水島豊教授(老年科学)で、

1 「化学療法」(水島教授)、
2 「放射線療法」(真里谷靖 放射線科講師)、
3 「化学療法・放射線療法の併用法」(阿部教授)、
4 「QOLの改善をめざした再建療法」(小林 慎 第一外科講師)、
5 「肝臓の移植治療」(袴田 健一 第二外科助手)、
6 「疼痛緩和療法」(佐藤哲 観 麻酔科助手)についてそれぞれ講演が行われる。

この学会は「日医生涯教育制度に係る県医師会認定講座」として承認されている。お問い合わせは弘前医学部事務局(電話39-15240)まで。

編集後記

暑かった夏をなんとかやり過ごして、実りの秋にふさわしい静かな時間が戻ってきた。暑さの中、「ウォーカー」原稿のために夏休みの貴重な時間を割いていたことに改めて感謝したい。

外部評価も大詰めを迎えようとしている。医学部の多くの委員会の開催が随分少なくなった。わが広報委員会も、「ウォーカー」発刊に注ぐエネルギーが以前より少なく、済むようになつたような気がする。やがて来るであろう次の第3者評価に向けて、これまで外部評価を受けるために注いだきた多くのエネルギーを、実質的な業績の向上に向けるべき時が来た。

国立大学の独立行政法人化が間近に迫っていると、言つてよいのだろうか。反対の声も少なからず聞こえるが、それに備えることを怠つてはならない。外部評価や独立行政法人化が現実のものになってみると、これまでわれわれが注いできた努力の意味が一層明確に見えてくる。

過日、北東北地区大学ガイダンスセミナーに参加した。大学における「教養を伴った専門性の育成のため」に入学試験はどうあるべきかを少しだけだが考えることができた。もう一つ、セミナーに参加して知ることができた言葉、「木はその実によつて知られる」(ルカ福音書)

(佐藤 記)

●附属病院
辞職
11・9・30
泌尿器科 助手
西村 祥二(青森県立中央病院)
11・7・19
第二内科 助手
畑山 亨(開業)
11・8・31
形成外科 助手
新明 康宏(むつ総合病院)

配置換
11・6・16
内科学第二 助手
田村 好弘(附属病院 助手)
派遣
11・9・1
公衆衛生学 講師
清野 景好(12・11・31)
(ジャマイカ国マンデビル)
耳鼻咽喉科学 助手
一戸 学(12・11・31)
(ジャマイカ国マンデビル)

11・7・1
小児科 助手
杉本 和彦(国立弘前病院)
採用
11・7・1
小児科 助手
田中 完(岩手県立北上病院)
泌尿器科 助手
菊地 隆(医員)
昇任
11・6・16
第一内科 講師
對馬 健一(医学部 助手)
11・8・1
皮膚科 講師
今 淳(医学部 助手)
皮膚科 講師
中野 創(医学部 助手)
周産母子センター 助教
佐藤 秀平(附属病院 講師)
周産母子センター 講師
尾崎 浩士(附属病院 助手)
配置換
11・7・1
形成外科 助手
新明 康宏(医学部 助手)